

建築設備技術者協会 野部 達夫氏



— 就任の抱負について
「6月にまとめた中長期計画『JABMEEビジョン2030』を今後の羅針盤として、計画を具体的に実現していきたい。特に関心を持っているのは、JABMEEビジョンで掲げた『人間の健康と安全及び自然・地球環境の保全を担う技術者として、その使命と職責を自覚し、品位の向上と技術の研さんに努め、

新会長 Interview

6月21日の理事会で建築設備技術者協会の新会長に就任した。改正建築士法に建築設備士が位置付けられ、設備技術者の社会的地位が高まるなかでどう協会を運営していくか、あるいはビッグデータの活用やスマート化といった新技術による業務環境の変化に技術者はどう向き合っていくべきか。かつて設計実務を18年間経験し「技術者の心は忘れていない」と語る野部達夫新会長に今後の協会の役割について聞いた。

誠意を持って職務を遂行することを促す」という理念の現だ。技術者がその職能を果たすためにどのような環境が必要なのかを考えた

「経験上、設備技術者の職務は硬直化したルーティンワークではない。物事をあらゆる方向から観察して問題点を見いだし、知恵を働かせて解決する仕事だ。技術者が裁量と責任を持って働く環境が重要だ」

裁量と責任持つ技術者に

「建築士法改正により建築設備士が法律に位置付けら

れ、一定規模以上の建築では意見聴取も努力義務化した。この地位向上の流れを絶やすことなく、継続的に働き掛けしていく。ただ、地位とは自らが宣言するものではなく、社会からの認知が不可欠だ。独断専行な主張だけでは容認されるはずがない。周辺との親和性を保ちながら、地位向上に向けた雰囲気醸成する

「そのためには若手技術者の育成が不可欠だ。工学的な専門知識が技術者を動かす動力だとしたら、教養や文化的資質は行き先を決めるハンドルだ。単に仕事をこなせる人材を目指すのではなく、知恵と経験を総動員して問題を解決する視野の広い技術者を育成したい。多角的な技術者を育てるという意味では、女性技術者のロールモデルを示す設備女子会の活動にも期待

している」
— 技術者の育成について
「業務が合理化するほど技術者の仕事はルーティンワーク化し、技術者のプレゼンスは低下していく。ビッグデータやスマート化、IoT(モノのインターネット)によってこの流れはさらに加速することが予測されるため、今後の技術者のあり方については協会でも議論を深めていきたい」

を見つめ直し、設備技術者が職能を発揮するために協会が何をできるかを考えて運営したい」
* (のべ・たつお) 1983年3月早稲田大学大学院修了後、同年4月清水建設入社。89年3月早稲田大学大学院博士課程修了。98年4月早稲田大学理工学部非常勤講師、2004年4月工学部建築学科教授などを経て、11年4月から現職。東京都出身。1958年4月30日生まれ、58歳。

記者の目

「人間の仕事は余計なことを考えること」と語り、コミュニケーションやIoTといった技術が発達した時代だからこそ技術者自身が問題を発見する創造力が必要だと強調する。学生を指導する際にも繰り返し「責任を持つから失敗しろ」と呼び掛けることで挑戦と失敗の経験を積ませるといふ。
趣味は酒場における人間観察で、学生時代から新宿は馴染みの街だという。山尻尺八師範の資格を持つ。